

体験版

萌える海戦
サブマリン
伊150

スズキケイ

スズキケイ

キャラクター紹介

おかくらはひかり

岡倉光

日本乙女帝国海軍少佐。二十才。伊一五〇いちごまる潜水艦長。

勇猛果敢にして繊細緻密な頭脳を持つ美女艦長。

秩序と序列の海軍の中で、一人独自の道を行く一匹狼。

身長一八〇センチのスポーツウーマン。

酒が好きで、携帯酒缶をいつも軍服のポケットに入れている。

だいぐうじていこ

大宮寺丁子

少尉。十六才。伊一五〇の新任しょうすいらいちよう掌水雷長。

リアル世界で商船学校に通っていた二等航海士。臆病な現代娘。

バーチャルWW2シュミレーションゲーム（生身の身体を使ったバーチャル二次大戦）に誤って紛れ込んだ。すぐ泣きわめく。

通称、サイレン放水車。

こなみ

小波みづく。

水兵長。十四才。水色ツインテールの少女。水雷科員。

元瀬戸内の海女。得意技は、全裸素潜り。音感超能力。美声。

こうの
甲野リン子

中尉。十六才。航海長。ヘソ出し軍装とリボンカチューシャが特徴の乙女。古式ゆかしい六分儀を使いこなす航海ナビ。敵の艦影を、すべて記憶している人間船舶名簿。

おつの
乙野レン子

上兵曹。十六才。操舵長。ヘソ出しセーラー服とボーイッシュな短髪のユニセックス現代娘。操舵系を受け持つ。外見に反して古風な言葉使いをする。舵輪の操作はレーサー並みに上手い。

うしお
潮イルカ

特務少尉。十九才。砲術長。ごく普通のOL出身だが、砲術に関することになると思が騒ぎ出す。連合艦隊ファンの大艦巨砲マニア。潮カイルカの姉。

うしお
潮カイ

二等水兵。十七才。砲術員。気が弱い男顔のイケメンボクっ娘。砲術長イルカ姉にばしられる。たるんだ仕事をする。と海軍式バットで姉に尻を叩かれ、生傷が絶えない苦勞人。時々、乙女兵員の性的慰み者にされる。

へい
丙ガク子

上兵曹。十七才。通信長。聴音手とレーダー手も兼ねる。電子系機器に強いラジオライフ・アクションバンド娘。艦外に出る機会が少ないため、全裸にヘッドホン姿がデフォとなつてゐる。

かわ
河ユキ子

機関大尉。十六才。機関長。機械に強いメカ好き娘。
エンジン機関を溺愛している。機械を擬人化して意思疎通ができる。いつも作業着を着て機関室で油で汚れているが、顔はアイドル系。

はたのりこ
畑海苔子

二十才。軍医少佐。軍医長。あくまで美少女の眼鏡っ娘。
無口で目立たない大人しい空気娘。軍医として伊一五〇にひっそり乗り込む。肩書きは海洋生物学者。潜水艦内で謎めいた行動をとる。別名、長門モドキ。

くろなわきっこ
黒縄亀甲子

二十才。少将。とりあえず美女の和風オカッパ娘。
日本乙女帝国・海軍軍令部第一課・作戦参謀長。
S系攻撃的性格で片手にムチを持つ。

いうらしょうこ
井浦祥子

二十才。大佐。マレー半島へナン海軍基地・第八潜水戦隊司令。
岡倉光艦長の上司。インド洋潜水艦作戦の指揮官。
伊号潜の戦果巻き返しを図るため、決戦兵器、伊一五〇を呉から呼び出す。

ヨアンナ・シエプケ

十八才。少佐。ナチスドイツ乙女海軍Uボート909の女性艦長。

誇り高い高飛車なゲルマン娘。

モンスーン戦闘隊の一艦として、日本海軍ペナン基地に派遣され、岡倉艦長の伊一五〇と狼群作戦を組む。

Uボートエース、ヨアヒム・シエプケの子孫（自称）。

金髪ロングの海^{ローレライ}の妖精のような美少女。

一 みづくの海

広島湾の波は静かだった。

その瀬戸内の静かな海を、泳ぐ一人の海女の姿があった。

水色の髪の毛のツインテール。

海に溶けてしまいそうな髪と、真っ白い素肌。

青い海面に白く浮かんだその裸身は、陽に輝いて、遠くからでもよく見える。

背泳ぎで、ぽっかり海に浮いて、裸体を陽にさらし、波間に漂っていた。

「おおーい。みづくちゃん」

遠くから漁船が近づいて、乗組員の乙女漁師たちが海面に呼びかける。

裸で泳いでいたその海女が手を振った。

晒した裸体を隠そうともしない。

漁船から海を眺める漁師たちは、手を振る海女の美しい肢体に羨望の視線を送った。

海水に濡れたイルカのような流線型の身体に溜息をもらす。

みづく、と呼ばれた少女は、裸体のまま漁船に上がり魚籠^{びく}を捧げ

て仲間に見せる。

「大漁」と笑顔で言う。

取れたてのウニとか牡蠣が船倉に放り込まれる。

覗きこんだ船倉の中には魚類がうようよ。仲間も大漁だ。

「今日の海はとても穏やかね。昨日はあんなに荒れていたのに」
陽光に輝く水色ツインテから海水の雫が流れ、なだらかな胸のふくらみを通って下腹部に集まり、長い太腿を流れて足元に滴る。

白い肌と、発育途上ながら均整の取れた体は、フィギュアかアニメのようだ。

「み、みづくちゃん。下半身ぐらい隠してよお」と漁船の乙女漁師が顔を赤くして、いつも戸惑って言う。

「へ？　なんで」みづくはいつも間の抜けた返事をする。「女の子どうしだもん。べつにいいんじゃない？」

と言って、ずい、と股を広げ裸体で仁王立ちをする。

股間の線と柔壁の奥の真珠が、モロに見えている。

「またそんな野卑な言葉づかいをする……」乙女漁師は顔を俯けて小言を言う。「ネットスラングはあかん。世間では社会性を疑われるんや。乙女は優雅な関西弁を使わないと、あきまへんよ」ぶつぶつ呟く声が小さく繰り返される。

小言が多いメガネっ娘の漁師だ。

しかし小言もまたメガネっ娘の恋愛表現の裏返し、ということは常道なのだが、みづくはまったく気付かない。

「でも、ここって瀬戸内だよ。広島弁が標準です」と、みづくは、すつきりした標準語で言って、メガネっ娘をかわし、裸体のまま漁船の船室に入って、威勢よく神棚に拍手を打つ。

船に祀ってある小さな神棚、船魂神社に今日の大漁のお礼、自然への感謝と糧となる魚類への鎮魂祝詞を上げる。

祭神の船魂は、日本神道の最高神、アマテラスの萌え絵だ。

青い大空と海原の中、みづくを乗せた漁船は港へ舵を切り、呉へ針路を向けて行くと、漁船の前を、悠々と巨大な軍艦が横切っていく。

戦艦大和と武蔵、そして沢山の巡洋艦。連合艦隊だ。

呉は連合艦隊の大根拠地なのだった。

大和は南洋の停泊地トラック諸島へ向かうのだろう。

去年の暮れ、十二月八日から始まった連合軍とのバーチャル太平洋戦争は、初戦連戦連勝だった。

しかし夏を過ぎたあたりから敵の猛反撃が開始され、仮想世界の太平洋は、波頭を赤く染める激戦場と化していた。

帝国海軍の基幹空母四隻が沈んだ噂も、軍の嚴重な緘口令をこぼれて民衆の耳にまで届いていた。

「あつ、また針路を横切って行きやがったなあ。武蔵のやつめ」と漁船の二十才の乙女船長が子供を叱るような口調で文句を言う。

「おい武蔵、お前は横柄だ。態度もガタイもでかすぎー。木の葉みtainな漁船だからってなめちやいかんぜよ」竜馬ファンなのか土佐弁が混じる。

前を横断する七万トンの軍艦に、五十メートル前方から道を譲れと文句を言う。気の荒い土佐っぼだ。

「連合艦隊のやつらは横柄すぎ。乙女はお前らなんぞにやなびかねえ。女の子は軍艦なんか興味ねえ。欲しいのはイケメンだけだよ。ふんぞり返った大和なんぞ、大嫌い」と言つて、ふんぞり返る乙女船長は、それでも連合艦隊の勇士に見とれている。

目がとろんとして、恋する乙女の瞳だ。

乙女はいつの時代も好きなものに素直になれない。

ツンデレは普遍だった。

しかも彼女は隠れミリオタらしい。

呉付近には彼女のようなミリタリー乙女がたくさんいる。

いざ敵船発見ともなれば、漁船は船倉に隠した連装機銃を甲板に構え、海防艇に早変わり。乙女漁師はみんな予備役だ。

みづくは、そんなツンデレ船長の姿を、微笑して見ている。

みづくは今、海軍の水雷学校に通っている現役の水兵だった。

特別休暇をもらって、地元の余暇を楽しんでいたが、もう平和な漁師の世界とも、さよなら。

呉鎮守府から潜水艦乗り組みの辞令が届き、明後日、出航の司令が第六艦隊に下りていた。

港に居並ぶ艦隊の列を眺め、遠く聞こえる汽笛に心が浮遊する。

「どこへ行くのかな。……たぶん私も南洋だろうなあ」

と思いつながら、行きすぎて行く大和と武蔵を眺める。

瀬戸内の夕暮れの海を、巨大な軍艦が豊後水道へ向けて南下して行く。

心なしか、その艦影が幻のように霞んで見えた。

未来を暗示するように……。

おつ、榛名、あれが長門、あれが陸奥。と熱心に独り言を呟いている乙女船長の楽しいげな呟きを微笑して聞きながら、

「船長、さよなら。お元気で」と最後の別れになるかも知れない挨拶を送る。「私は乙女の戦いに向かいます」

憂いを振り払い、みづくは裸体に服を纏う。

白いセーラー服だ。

乙女の戦闘服である。

海軍の桜と碇のマークも袖に付いている。

ヘソと脇腹が出ているのは規格である。

下がミニスカでパンツが見ているのも、もちろんだ。

彼女の名は、小波^{こなみ}みづく。十四才の海育ち。

海に映えるその水色の髪と青い瞳は、異国の血ではなく、日本人としては希少な天然のものであった。

二 江田島

瀬戸内の海には、小島が多数点在している。

その多くが帝国海軍の軍港に使われていたが、その中の一つに、江田島と言う島がある。

海軍兵学校という軍の学校があつたことで、ミリタリー人士たちにはつとに有名だ。

二次大戦期の有名な日本海軍指揮官はたいていここを出ていた。大日本帝国海軍の一つの象徴である。

……とかまあ、真面目な戦争話は、真面目な歴史書にまかせると

して、こちらバーチャル仮想太平洋戦争では、海軍兵学校もまた別の世界が展開しているのである。

＊

「帰りたいよおゝゝつ」と、また乙女がいつもの口癖でわめいていた。

目から噴水のように涙が飛んでいる。

「また丁子が泣いてるよ」

士官学生たちが泣いている少女を遠まく。

詰襟や軍装姿の美少女士官学生たちだ。

「空襲のサイレンみたい」と浮輪を腰に付けた白スク水の少女士官Aが言う。

「放水車も出動してるし」ふんどし一丁姿で水泳訓練中の士官乙女B。

「泣き虫、臆病、粘着質とは、なんて古典的な漫画乙女」南部拳銃を両手に持ち、上は詰襟、下はパンツのウィッチーズ軍装少女C。

「さすがに希少種」機関銃を重そうに担いだミニスカ陸戦軍装少女D。「名前は勇ましいんだけどね」

そこは江田島の海軍兵学校である。

ただし学生は全員乙女だけだ。

第一種軍装の詰襟の下はズボンではない。ミニスカだ。

海ではみんなスク水だ。時にパンツだ全裸だ。体操着はもちろんフトモモ露出の昭和ブルマだーっ。

一人で泣いている少女の名は大宮寺丁子。十六才のをとめ処女である。

彼女は第XX期海軍士官候補生の過程をもうすぐ卒業予定だった。しかし配属先が決まらず教官と揉めている。

「私はただ、ゴーエーの海戦ゲームがやりたかったただけなんです」と大宮寺丁子少尉候補は、卒業面談で、上官を前に、じめじめと言う。

煉瓦でできた時代がかった講堂で、上官と懇談中。

「戦争ゲームですよ。ただのゲームですよ。リアル世界で偶然手に入れたWW2海戦ゲームのソフトをPCにインストールしたら、突然この立体戦争ゲームの世界に飛ばされていたんです」

——それは恐ろしい四次元バーチャル・ゲームエンジン『魔法のリンゴ』を使っただけに違いない。

二十一世紀後半の国連が密かに開発した陰謀ソフトだった。

裏の国際世界が操る立体戦争ゲームに、密かに乙女たちを誘い込む。

ゲーム参加者は、政府のコンピュータが秘密裏に選別し、ログインできるのは美少女だけ、というとんでもない設定のネットゲーだっ

た。年齢制限もあり、今回はU アンダー・トゥエンティ 2 0 限定のWW2海戦シミュ

レーションらしい。

（リアル世界の時間軸は二十一世紀後半にあり、平和なリアル世界では、国際エスタブリッシュメント・オヤジたちが、モニターで乙女たちの戦いを観戦している）。

しかもログインすると、乙女たちは肉体のまんまバーチャル世界に閉じ込められてしまう。戦争が終わるまでリアル世界に帰れないのだ。

「出口も帰り方もわからなかったから、しょうがなくこの世界に住み着いて放浪しているうち、バーチャル養父母に拾われ、進路選択でこの海軍士官学校にたどり着いてしまったのです」と大宮寺丁子が言う。「生活が大変でした。でも軍隊なら無償で屋根付きの家に住めて、食べ物の配給もありますし。しぶしぶここを選んでしまいました」
「それ」とめそめそ泣く。

「それは苦勞の多い半生だったね」教官の大佐がケラケラ笑って受

け流す。「でも自分で選んだ選択肢だし」

「選択分岐のボタンがほかに付いてないんです。戦争関連の針路しか選択できないようになってるんです」と丁子は訴える。

「だってこれ戦争ゲームだし……。今は戦時中。時代が時代だよ」と、もう一人の乙女大佐が呆れて言う。

「ゲームシチュは美少女だけの二次大戦。徴兵されるのはU二一〇しもふたまる

の処女をとめだけ。ちゃんと時代の仕様を読まない」と

「仕様なんて付いてなかったです」ムツとして言う。「でも確かに、ここの日本国民は親切な人ばかりでした。ロリなやさしい女の子ばかり。社会は楽園でした」と丁子は、バーチャル過去人生を回想する。

「しかし、嫌々やってる割に、成績は優秀だわよね」と乙女教官が卒業成績表を見る。

「リアルで商船学校に通ってましたから。二等航海士の資格も持つてます」と言って少し胸をはる。

細身の割に大きい胸だ。サイズは九〇のF。

ネイビーブルーの詰襟服を、ぱつつんに盛り上げる胸は、なかなか見事。

しかも下はミニスカ。

パンスト靴下禁止の生フトモモと足首を晒す。

日本乙女帝国は軍装が美しい。

細く締まった制服のウエストラインも、ミニからはみ出すお尻の曲線も、美少女にしか着られない規格であった。

しかもミニスカの裾からは、こんもりした局部の線が、パンツの質感もあざやかに、緻密に描き込まれて見えている。

士官への採用基準はとても厳しい。選りぬかれた人材ばかり。

当然、顔もみんな上級。乙女は顔とスタイルだ。そこは美少女が階級を作っている世界だ。それが理想のバーチャル世界、日本乙女帝国だーっ。

大宮寺丁子。十六才。黒髪ショートが似合ってます。

でっかい萌え目に小さな鼻と口。眉は細く、顔の輪郭線に緩みはなし。顔つきは一見すると精悍な和風海軍士官。

袖に付けたる少尉候補の金半筋一本。

ネイビーブルーの詰襟が最高。

しかし性格が少しダウナー。

希望部署を懇談している上司に泣きながら文句をたれる。

乙女帝国海軍は、なるべく個人の希望を融通してくれる自由さがあつた。数が少ない兵学校士官は大事にされている。

そこへ、頭に乗ってワガママを言う丁子は割と戦略家だ。

「しかし、よね。もうこの世界に来たら、こっちで死ぬまでリアルには戻れないのよ」と乙女上官。「みずから拳銃で自決を選ぶのも虚しかろう。せつかく紛れ込んだ仮想世界。ここは一つ肉体で体験できる戦争を骨の髄まで楽しんでみては如何か？」と教え諭す。

楽しそうな十八才の乙女の大佐。嵌まっている。偉そうな金モール飾緒と詰襟が、コスプレのように嵌まっている。

「なんたって心おきなく敵を轟沈できるんだ。救助なんか必要ないのよ。死んだ敵はあっちの世界に帰るだけなんだから」さっぱりと

言う。「勲章も貰えるのよ」と胸に並んだ棒状のカラフルな略綬リボンをニコニコ笑って見せつける。

「そそ。敵激滅。轟沈だよ轟沈。作戦立てて艦隊を動かし大砲弾ぶっぱなしてやつつける。まさに艦隊ゲームだよ。ゴーエーだよ」

めちやくちや言ってるようだが、内容はリアル軍人と大差なし。戦争とはそういうものだ。

大宮寺丁子は、少し乗り気になる。

「大和に乗せてもらえます？ 大和なら乗ってもいいです」

「ええっ。大和はちよつと。倍率高くて……」と教官は渋る。「乙女はなぜかみんな大和に乗りたがるのよ。でももう定員。首席か次席

で恩賜の時計とか貰った人じゃないと無理。あと華族とか雅なコネがある人じゃないとね」

ぶー、と不機嫌な顔をする丁子。

「戦艦金剛なんてどうかな？」と、もう一人の教官がネタを振る。「三万トンの戦艦だよー。女の子の好きなダイヤモンドだよ。艦首にちゃんと桜の御紋がついた戦艦」

「金剛なんて知らないです。聞いたこともないし。老朽マイナー艦は嫌です」とそっぽを向く。知ってるくせにきっぱり言った。

「怒られるよ。ミリタリー方面の人に」眉を顰める教官二人。

「では雪風なんてどう？ ゲームでもたぶん沈まないと思う。幸福艦だから。戦死はするかもしれないけどね。確立は低くなるよ」

「名前は知ってますけど……」渋る丁子。「これ駆逐艦ですよ。駆逐艦って軍艦じゃないですよ。有名だけど小物だし。やっぱり広々とした大和級戦艦か、せめて巡洋艦に乗りたいです」

「むむう」小物だなんて、雪風に失礼な、と思う上官二人。

「まあ数も少ない大事な海兵士官の意向は、なるべく尊重してあげたいけど。しかし艦名指定でいきなり超下級戦艦は難しい。それに配置先で待っているのは即実戦よ。しかも大和って、これからが大変なのよ。現在、我が帝国海軍は米英に押されぎみで、南方の戦場は激戦の最中だし」と思案する上司。

「そうだ」と、厳しい顔をする乙女大佐。「今ちょうど欠員のある巡洋型が呉にある。最新鋭の艤装を組み込んでいるヤツが。あれに乗ってもらおう」

「ああ。あれか」とハッとした顔をする乙女上官。

「最新鋭の巡洋艦？」丁子の心が動く。

「うむ。現在、呉ドックで大改装中なのだが、秘密兵器と言っている。我が海軍のエースである。外洋を航海できる巡洋型だ。艦長が優秀な卒業生をくれと探しに来ていた。今、水雷長が戦傷で欠員中だな。水雷長見習いの士官として行ってみないか？」真面目な顔で言う。

「役職は掌水雷長になるだろう」隣の上官が言う。「未知の潜在力を秘めた優秀な大宮寺くんを、我々は心を込めて推すぞよ。そこでまずキャリアを磨いてはどうか？ 我々としても君の能力を測ってみたい。兵学校出は、最終的に連合艦隊長官も目指せるからね。受けるならば卒業と同時に即、少尉にしてあげる。大和に乗るのはその

後ということだ」

「そうまで言われるのなら……」と大宮寺丁子。おだてに弱いO型だ。「私、リアルで商船学校の学生ですし。即、操艦には対応できます。で、行く先はどこですか？」

「当面はインド洋からアフリカ沿岸。ナチス海軍と連携して戦うことになる」

「インド洋とアフリカ……」

兵学校の窓の外には、広島湾が遠く見張らせる。

（アフリカなんて、リアルでも行ったことはないなあ）と丁子は、窓から呉の港を見ながらぼんやり思う。

潮の音が響く。

渦を巻き、波音を高めて、大宮寺丁子を取り巻き始める。

関を告げる呉の海の響き。

濃紺の潮が巻き、戦艦の連装砲が回転する。

甲板を水兵が駆け回り、舵輪が回る。

大宮寺丁子は、運命の渦潮に、巻き込まれようとしていた。

赤い潮流。

海戦という、時代と歴史が作り出す海の嵐の中に。

＊

呉工廠のドックには、一つの艦が修理中であつた。

海水のないドライドックに、巨大な艦船が船底を晒している。

新しい艀装が急ピッチで行われていた。

艀装とは、航海設備を組みこむ工事で、艦の場合、戦闘のための装備を含むため極めて重要だ。

設計段階から艦長を中心に委員会が作られ、現場にいろいろ注文をだす。

懇親会と称する現場作業員と兵員たちの飲み会も公費で頻繁に催されると言う。飲み会で飛びだすのは、『轟沈』という軍歌だそうだ。

江田島の兵学校を卒業し、規定の軍刀もしつらえ（少尉以上は軍刀必携）、少尉候補の現場教育期間をすつとばして少尉に任官し、真新しい詰襟服を着た大宮寺丁子少尉は、少しウキウキしながら目の前にある呉港に乗船する船を見に来た。

指定された区画を見定め、自分の乗船する予定の船を見上げる。が、目の前の艦船を仰ぎ見て、顔が豹変した。

「げっ！ なにこれ……」丁子少尉、青ざめて驚愕。眼窩から目が飛び出た。

「ガビーン！！！！これ巡洋艦じゃないよ……。戦艦でも軍艦でもない。小物の駆逐艦ですらありません。海防艇ですらない。普通の船と違う。……これは恐怖のドン亀、伊号潜水艦ですーっ！」

そこは呉軍港の潜水艦隊専用ドックであった。付近にあるのは潜水艦だけ。

艤装修理中の艦は、伊号第一五〇潜水艦であった。

艦橋に描かれた艦名は『イ50』。

これは旧式のほうで、新型の巡潜が就役してきたため、旧艦は百を足して伊一五〇となった。

つまりは海大型の旧式艦だ。伊号はナンバリングが複雑である。

一応、巡洋航海はできる。

排水量は海上で一四〇〇トン。全長一〇〇メートル。

駆逐艦ぐらいの大きさがある。

一見、威風堂々。だが、あだ名は鈍速の亀『どん亀』と言う。

でかいけど速度が遅いためだ。

WW2では、伊号潜は、その装備の弱さから戦果を上げられず、ほとんどが海底に撃沈されてしまった。

丁子の顔から冷や汗が、どっ。

「だまされた……」

たちまち顔が曇って目から涙が飛ぶ大宮寺少尉。

「潜水艦ってキツイ環境でみんな嫌う部署だよ。やだよドン亀なんて……」

乙女サイレン発動。

「鉄の棺桶。最悪の環境。地味すぎ！ マイナー兵器！ チハ戦車より知られてないよおっ！」

続いて乙女放水車。

「キャリア磨くたって、私のキャリア、ここで終わりですう。伊号は生還率が最悪なんだから！」

軍刀を手に持ったまま、巨乳娘が子供のように手放して泣きわめいている。実際、十六才の子供なのだが。

「あ、大宮寺少尉ですねー？」と工事中の潜水艦から、水兵服の少女が大声で連絡橋を渡って、埠頭に駆け寄ってくる。

ひらり、と手すりを飛び越え、身のこなしも軽い機敏な乙女。

駆け足で近寄り、

「お待ちしております」大宮寺丁子の正面に立って、びしっと敬礼。

水色のツインテールに水兵帽を乗せ、上はセーラー服に下は防暑服の短パン。引きしまったウエストに、ぴっちりしたお尻の線が美しい。

冒頭に出てきた広島湾の海女っ娘である。

階級は水兵長だ。

「私、伊一五〇の水雷科員を努めることになります、小波こなみです」

「……は、はえ」うわの空で泣きながら返事をする大宮寺少尉。「水雷長を努めまう、大宮寺でう、ひつく」顔中涙だらけ。「愛称は、てーでう、ひつく」

「てー少尉ですが。掌水雷長にぴったりの名前ですね。きっとサラトガ級の大物を轟沈できますよ！」

水色ツインテは快活に言う。

「私の愛称は、とある仮想歌姫と同じなのですが、少し問題があるので、本名で、みづくと呼んでくださいね。呼び捨てでかまいません」

みづくは、目の前の上司、大宮寺少尉を、優しい青い瞳で見る。

（少し、たよりなげ、かな。私がしっかり守ってあげよう）と思いながら目を細めて微笑する。

丁子は、みぶくの美しい水色のツインテと、スタイルの良さに見とれて、真顔になって泣き止んだ。

『スタイルいいな……。ウエスト細い、私よかカワイイ、ちよつと悔しいなー』と涙目でも相手を分析している丁子。乙女レーダー装備。

「よお。君が新任の大宮寺か。よく来た」

背後から低いトーンの渋めの声が聞こえた。

二人の後に、士官帽をかぶった背の高い詰襟美女が立っている。短髪黒髪に尖った髪質。鋭い眼光。海軍の戦乙女だ。

階級章を見ると少佐だった。

「艦長の岡倉少佐です」と、みぶくが笑顔で紹介する。

「新卒でありながらエース艦の掌水になるとは大宮寺少尉、君さては優秀だな」と少佐は微笑する。「今、この艦には水雷長が不在でな。君がいずれ水雷の指揮を取ることになる。オレの片腕だ。期待してるぞ。艦長の岡倉光だ。よろしくたのむ」と右手を差し出した。

クールなオレっ娘である。二十才ながら艦長の風格が漂っていた。目深に被った佐官帽。袖には輝く三本線。ネイビーブルーの詰襟に少佐の階級章。ミニスカではなく下も男物のズボンを穿いている。大日本帝国海軍、正規の一種軍装だ。

潜水艦の横に彼女が立つと、海の指揮官のオーラが広がる。

丁子は、涙の跡を恥ずかしそうにぬぐって、あわてて右手を差し出した。

岡倉艦長は背も丁子よりずっと高い。

一八〇センチ近くある。見上げた首が痛くなる。と、渋めの戦乙女は、いきなりポケットから、銀色のステンレス

のできた携帯酒缶（船乗り御用達）を取りだすと、ぐいと煽った。

「行く先は激戦地だ。たるんだ行動をとる時にや容赦なくカミナリを落とすぞ」微笑しているが目が本気だ。灰色狼のような鋭い眼光

だった。

丁子はギョツとして身を引く。
（げっ。美少女だけどオヤジ系？ 戦闘船乗りコワス）と怯え、また涙が滲む。

「わー。すばらしい艦じゃありませんかー」セーラー服を着た乙女たちが、わいわい騒いで寄って来た。

伊一五〇に乗艦する八十名の水兵たちだ。

新任もベテランも混じっているが、全員同じ年ごろの美少女なので見分けがつかない。

「うーん。なかなかデカス。時化に強そス」

「潜水艦はローリングに弱いと言う。しかし、これは安心の巨大艦」

「でも海大型だね。古武士のごとき偉風です」

「ボロいと正直に言え」

「しかしですー、よく見ればこの艦ちよつと不思議な海大型です。

魚雷発射管、前六門、後二門。甲板には十四センチ二連装砲をそなえ。海大型というより巡潜丙型改ですかね。主機械も電動機もなぜか最新鋭。耐圧鋼板も厚いです。リベットではなく全溶接。限界深度、Uボート並みの二〇〇メートルは行けそうです。これはクジラを装ったシャチですー」

一見普通の美少女ばかりなのに、中身は筋金入りの軍オタ。

一般には活用できない発言が相次ぐ。

岡倉艦長、大宮寺丁子、小波みづくを取り囲んで、わいわいキヤーキヤー大喜びで潜水艦を見上げる。

異様な雰囲気のセーラー乙女大集団である。

「でも潜水艦って、ゴキと鼠の巣窟なんだよ」と、集団から外れて、しゃがんで円陣を作る下っ端乙女兵たちが正直に言う。

「新人たちは気楽でいいわ」

茶髪に着崩したセーラー。漢字のロゴ入りシャツがやけに珍走風な、腕に入れ墨アリのヤンキー古参水兵たちだ。

全員暗い顔でモクをふかしている。

しかしヤンキーはリアルでも美少女率が高い。

「Gはカンベンだよなー」煙を吹くヤンA。

「出航したら三か月は風呂に入れねー。太陽も拝めねー」灰を落とすヤンB。

「乙女には拷問」啞えタバコ、ヤンC。

「食いもんは缶詰。身体も缶詰。潜航中の艦内温度は機関科で百度越え。まさに地獄」タバコポイ捨てヤンD。

「私らみんな機関科でんがな。でも熱いの好きや。南洋大好きやでえー」たまにいる明るいお笑いボケE。

「限度があるだろ。百度だよ、百度！」ヤン一同、声を揃えてあきれる。

「上下すっぱんぽんで、快適っスよお」動じないボケE。

「勇ましすぎ。さすが乙女帝国のもののだ」笑って拍手するヤンたち。「心強いぜ。まあたっぷり働いてね。アタシらの分もね」

「おまかせおまー」素直に喜ぶボケE。天然のパシリである。

出帆前のウキウキ気分が伝わって来る。

しかし横で話を聞いていた大宮寺丁子の顔は、まっ青だった。

「あれ、大宮寺少尉、顔が青信号です」みづくが言う。

一同注目。

次に丁子の顔が赤くなる。

「赤信号」

丁子、泣く。

「警報アラーム」

涙が噴水のように飛ぶ。

「メインタンク注水」

「大宮寺少尉、生きた潜水艦」乗員一同は、きやははと愉快に笑う。

丁子は、泣き続ける。

「わっはっは。うれし泣きかあ。新任将校！」と肩を叩いて豪快に笑う岡倉艦長。

*

青い溶接火花と鉄槌を打つ騒音が、呉工廠ドック全体に響いてい

る。

乗艦する予定の伊一五〇は、ほぼ改装修理は終わっている様子だった。

木桁も取り払われ、再進水が間近い感じが伝わる。

「オレは左遷されたのではない。自分で選んだのだ。ドン亀をな」
岡倉少佐は言う。

目深にかぶった士官帽の鍔の影から、鋭い目が光る。

乙女工員たちの働く姿も行き来する潜水艦の甲板を、新任少尉を連れて艦長は歩く。

「ドン亀で何が悪い。ゼロ戦なんぞ、なんぼのもんじゃい」

大宮寺丁子はおどおど、付いて行く。

しかし、この潜水艦という部署、やっぱり士官には人気がなかったようで、大抵の兵学校卒業者は第一志望に飛行機を選ぶらしい。（乙女海軍調べ）。続いて戦艦、軍艦、駆逐艦。しゃーねえーな潜水艦と続く。遅い亀はみな避ける。

ドン亀というあだ名が人気のなさを示していた。

なのに岡倉艦長は最初から、このドン亀勤務を第一希望に選んでいた。艦長養成の呉潜水学校は首席で卒業していた。

異様な頑張りには何か特別な理由があったと見える。

「あつ、これは！」と大宮寺丁子が艦橋を見て突如、驚きの声を上げる。

艦橋に付いている艤装に注目。

「八木アンテナ……。しかも折りたたんで引き込み式」

「そう。対空用八木式電探。米軍のSDレーダーと同じものだ。水上レーダーもドイツ製逆探も付いてるよ。オレが艦政本部に怒鳴り込んで完成を早めさせ、独断で艤装に加えた。こっちの乙女海軍は問題点の追及に迅速だぜ」

「ちなみに今は何年ですか？」と丁子は目をぱちくりして聞く。

「タスクカレンダーでは一九四二年になってるはずだが」

「これは確か伊五八と伊四四に付いてた十三号レーダーと似てますね。でも戦争終盤の一九四四年の艦でしたよね、あれは」

「泣いてばっかだと思ったら、妙に詳しいな。てーちゃん」艦長の

目が鋭く輝く。

「実は、私もにわかミリオタでして」舌を出して苦笑する。「ゴーエーのミリゲに嵌まるぐらいですから。でも実際に伊号潜に乗るのはかなり抵抗が……。私、戦史で伊号の末路を知ってますもの……」
と言つて、イ50と白い番号の書かれた真新しい艦橋の鋼板を手で触る。

冷たい鋼鉄の感触が手に伝わった。

艦橋には対空用二十五ミリ二連装機銃が三基が乗っている。

前甲板には十四センチ二連装砲。

「武装重厚。電子系も完備してるし。すごい海大型だわ」丁子が呻る。「外観はボロ船なのに」

「生き残るにやあ知恵が必要なんだよな」ニヤリと笑う艦長。「まあ戦場での生き残りには、運という要素もあるんだが。しかし運はやはり行動が呼びこむものよ」ドックに並ぶ巨大な鋼鉄の塊を見つめる。

「あ、ところで、てーちゃんはクロステルマンの撃墜王は読んだ？」
突如ミリネタに走る艦長。

「え？ いきなり飛行機モノですか？ 一応、読みましたが」あつさり返す丁子。

「読んでどうだった？」

「ヨーロッパ戦線の電子兵器の充実ぶりに驚きましたね。特にイギリスはレーダーと無線がすごく進んでる感じです」

「相手はそのイギリスだよな」

「うっ」と詰まる丁子。

「イギリスの科学発想力とアメリカの工業力が手を組めば、敵が無敵の軍隊になるのは当たり前よ。そしてオレらが行くのはインド洋と大西洋だ。来るぜえ。すげえ兵器を積んだ敵の戦艦空母、駆逐艦や飛行機がよ」

丁子の顔が青くなる。

「もう任官は済んでいる。ここで逃げたらてーちゃんは脱走兵だ。覚悟はできてるなあ？ 掌水雷長」と艦長は顔を寄せて新任を脅かす。

頬に両手をあてて、顔から冷や汗を流す大宮寺丁子。

爆雷攻撃のすさまじさは記録写真や映像で見たことがある。

敵の優秀なソナーと音響追尾魚雷。ヘッジホッグ。

連合軍の駆逐艦と哨戒機に追い詰められ、海底に次々と沈められてゆく伊号潜。

鋼鉄の船体が割れ、水泡と重油を海に撒き散らしながら暗黒の深海に消えて行く。

WW2では、総計百二十隻以上の日本の潜水艦が暗い海底に人知れず沈んで行った。多くは全乗員を乗せたまま。沈んだ潜水艦は、今も現実の世界の海底に眠っている。

「優位の兵器を積んだ敵に勝つには、乗員の能力と知恵で埋め合わせるしかねえ。頼むぜ少尉。乗員八十人の命を預かってるんだ。これは戦争だぜ」

鋭い目つきで微笑し、猫足のデッキシューズを履いた艦長は、音もさせずに静かに先を歩いてゆく。

丁子は立ち止まったまま動けずにいた。

涙も出てこない。

本気で恐怖に襲われる時、涙は止まってしまうものだ。

*

潜水艦伊一五〇は、呉軍港の埠頭を離れようとしていた。

隠密行動のため、日本から出航する際、見送りはほとんどない。

ドン亀と呼ばれ、港から人知れず波頭の影に消えて行く。海の忍者か、影武者か。

きつい艦隊勤務に危険な海中潜行。標準的な限界深度はたった一〇〇メートル。海中では八ノット（約15km/h。自転車並み）程度とスピードも遅く、艀装も貧弱。船体外殻も弱く脆い。

しかし、武装には一撃必殺の兵器、酸素魚雷を備える。

参謀飾緒をつけた連合艦隊のお偉い乙女たちが、ちらほらちと呉の埠頭に立って出航を見送っていた。

その中に、一際美しい容貌の、中将の階級章を付けた長い髪の和風乙女の姿があった。

後醍醐司令長官だ。

凜とした容貌の武人であった。第六艦隊の司令部から、わざわざ見送りに来ていた。

呉の埠頭に、そつと一人立って、彫像のように直立敬礼している。

「岡倉。たのむ」短い呟きが漏れた。

春。咲き誇る呉の桜は、海風になびき、潮風に舞い散る。

長官の詰襟の肩にも、桜吹雪が舞い落ちた。

「両舷前進微速！」艦長の指示が機関室に伝う。

機関室の速度伝達機テレグラフの針が動く。

伊一五〇は岸壁を離れた。

艦尾ディーゼルエンジンの回転が上がり、二軸の唸りが排気管から漏れだす。

鉄の塊に、人間の意志の火が入った。

甲板に並んで立つのは、八〇名の選りぬかれた乙女水兵たち。

横一列に並び直立敬礼。

岡倉艦長は白詰襟で艦橋に立ち、離れて行く呉の埠頭を見つめている。

掌水雷長、大宮寺丁子は士官室に引きこもったまま出てこない。

「今回、水雷科は忙しくなるよつ。しっかりサポートがなきゃまずい！」と、小波みづく兵長が水色ツインテを風になびかせ、笑顔で敬礼。

慣れ親しんだ、呉の港よ、いざさらば。

「無事に帰ってこれるかなあ。新任の少尉、引きこもりの気があるし」と航海長、甲野リン子中尉が汗かき困り顔で呟く。「伊号は生存率低いからね。覚悟は決めておかないと」へソ出し防暑服と頭の上のでっかいリボンが海風にはためく。

「我ら一蓮托生の仲間なり。潜水艦は沈む時もみな一緒。寂しくなどあろうか」古風な現代娘、短髪に艦内帽を被った少年の様な乙野

レン子兵曹が言う。

「御国のために散りましようぞ。なんぞ命を長らえよう」

呉の桜を遠く眺める。

「機関と機械はおまかせあれ」とアイドル顔の河ユキ子機関長が敬

ウィツチ

礼。「魔女とは違って魔法は使えませんが、乙女海軍伝統の精神力でカバーいたします」すでに顔と白作業着が油で汚れている。働き者だ。

「まあみな人力で頑張るべしつ」と詰襟服の砲術長、うしお潮イルカ少

尉がびしつと敬礼。「でも潜水艦の大砲はお飾りなのよ。主役は魚雷だから悔しいっ。たくさん連装砲をぶっぱなしてお飾りの汚名を晴らしたる。水雷科には負けねえぞ！」片手に持った海軍バットを振り上げ、備砲十四センチ連装砲に頬ずりする。頭には長い黒髪に旭日鉢巻。

「ボク、下っ端はやだなあ。それに下はスカートが穿きたいです……」と隣で暗くぶつぶつふてくされるセーラー服にズボンを穿かさ

うしお

れているイケメン乙女。男顔の二等水兵、潮カイ。

出航の唄声高らかに。

クルーが歌うのは、軍歌『海底万里』だ。

狭い艦内で意外によく働く機関科ヤン娘の水兵も、一緒に軍歌を歌って伝声管から美声が響く。

兵隊たちが各所で合唱すると、艦全体にアカペラのボーカルが響き渡る。

みごとにハーモニーだった。

みな歌が異様に上手い。

音楽趣味でも持っているのか。

潜水艦は元気な歌声で満たされた。

「こりやええな。ステレオ付き潜水艦だぜ。音感がいいヤツらは耳もいいんだよなあ」艦長ヒカリちゃんは艦橋に立ち、双眼鏡で海を

哨戒しながら微笑する。「耳と目は、潜水艦乗りの命である」

「やだよ潜水艦なんて……」副艦長、大宮寺丁子は、いまだ士官室で一人めそめそ泣いている。

艦首に白波を立てながら、潜水艦は豊後水道へ針路を取ると、広島湾には漁に出ている漁船が伊一五〇の出航を見送っていた。

「みづくちゃん。がんばれよーっ！」漁船からたくさんの声援が聞こえる。

ツンデレ船長も見送りに来ていた。

「みんなあー。いつてきまーーす！」

みづくは、たたつと艦橋に登り、潜望鏡のてっぺんまでよじ登って、股で身体を支えながら両手を振る。

出初め式か、みづく。

スペック未知数の潜水艦と歌唱力抜群の乙女水兵たちを乗せて、痛潜、伊一五〇は、蘭印と呼ばれるマレー半島のペナン海軍基地へ向かった。

第八潜水戦隊の根拠地だ。

三 ペナン

温かい南の楽園のような島、ペナン島。

マレー半島中部、インド洋側に位置し、目の前にはスマトラ島がインド洋の波と西風を遮っている。

大戦前までは英領だったが、南進する日本乙女帝国がさつそく分捕って、天然の良港に海軍基地を作っていた。

島の北西側からは波穏やかなインド洋が見え、海岸から見る夕暮れは特に美しい。

赤い夕陽がインド洋に落ちて行く。

しかし日本帝国にとって、それは少し不吉な象徴だったかもしれない。

そこは英米の輸送船が頻繁に行き来する戦場であつた。

海の遙か対岸にある英領インドや、その西にあるアフリカ沿岸は、英国商船が頻繁に行き来する。

これら英植民地から物資を運ぶ貨物船の通行を阻むため、日本海軍は通商破壊作戦と呼ばれる海軍潜水艦史に名高い戦闘を行なつていた。

だが、ペナン潜水艦隊の司令、参謀たちは苦渋の顔色を隠せない。

軍令部や連合艦隊から厳しい声が響く。

「潜水艦はやはりだめだね」

「ドン亀は、輸送専門」

「二次使用でソロモンへ回すべき。補給専用に使いまくりましょう」

「亀は背中に荷物を載せて水中運送屋」

「それ以外に、使いようなし」

海軍上層部から届く厳しい声の数々に、ペナン第八潜水戦隊司令、井浦祥子大佐は苦悶していた。

士官帽の後に結んだ二十才の艶やかな黒髪が、落とした肩に力なく垂れ下っている。

スコア表を見つめて、その低調さに落胆した。

「伊号は、ここでもだめなの？ そんなことはないはずだわ。基本的な潜水艦のスペックに大きな差はない。問題は別にあるはずよ」祥子ちゃんは拳を握りしめる。「絶対に巻き返して見せる。深海に沈んだ仲間たちのためにも」

海図を睨みつけた顔に、悔し涙が滲む。

広げた海図にはバツ点が一杯書かれている。

味方の潜水艦が沈められた場所だ。

井浦祥子は、ペナンホテルに陣取る海軍司令部四階から港を見はらす。

広い埠頭には伊号潜が十隻。

さらにUボートも数隻並んでいる。

司令部には旭日旗とともに共同戦を張るドイツ軍の鍵十字の国旗もはためいている。

インド洋作戦は伊号潜水艦の晴々しい戦果を上げた作戦であるはずだった。が、今回の戦闘では、どうも上手くいかない。

行動が敵にまるつきり読まれている。

敵商船に高性能の護送駆逐艦と コルベット 駆潜艇がくつついて、攻撃を邪魔している。

連合軍の キラー・ハンター 潜水艦狩りグループがアフリカ沿岸まで進出しているのだ。

イギリス乙女海軍とチャールズ首相（一応美女）の戦略だ。

さらに暗号情報が解読されているのが結果からはつきりしてきた。せつかく戦史に残る栄光の戦場なのに、劣勢が巻き返せない。

共同戦線を張る人気者のナチスドイツ海軍Uボートも同居しているが、こっちの相棒は絶好調。

有名なデーニッツ（乙女）の『太鼓連打作戦』で大西洋の米英船を数百隻も沈めていた。

日本潜水艦隊、沈みっぱなし。

＊

「岡倉に自由にやらせてみたい」と井浦祥子司令は作戦会議の席上で言った。

ペナン司令部会議室には、南洋に展開している連合艦隊上層部の G F 美少女たちが集まってきていた。

井浦大佐は立ったまま彼女らを見つめる。

「連合艦隊はリアルでは敗北した。その方法論をまたなぞっても二の舞になるだけだ。乙女は独自の道に行く」

会議室はざわつく。

「それは大胆な発言だ。井浦大佐。ではあなたは、今の戦局を打開できるというのだね」詰襟に金色の飾緒を付けたGF参謀長、草下龍之子少将たつのこ（十二才）が人差し指を突き付けて厳しく問う。長い黒

髪に前髪を揃えた雛壇の姫君のような乙女である。

「できなかったら、こんなことは言いません。今は一つ、伊一五〇と岡倉艦長の行動を見守ってほしい。潜水艦の運用変更はその後の結果を見てからでも遅くはないでしょう」

「よろしい」司令長官、山本山九十九大將が決済した。「ぜひ結果を見せてもらいたい。それは我が海軍が最も望んでいることである」と言ってざわめく幹部連を制す。

一同は美少女GF司令長官の鶴声に押し黙った。

山本山大將。その容姿は、黒髪ストレートの深田恭子を、あくまで知的に洗練させた清流の如き理想の和風乙女である。

やや切れ長の涼しい目で井浦司令を一瞬見つめ、目が合った。

「戦果に期待する。私からも頼みます」大將は敬礼して、すみやかに退席した。

GF司令部は今、トラック島に進出し、南東方面、ガダルカナルの米軍と激戦の最中なのだ。一隻でも潜水艦が欲しいところ。

ペナン南遣分隊のわがままを通すには、厳しい戦況ではあった。

そこをあえて通したのは、GF長官の乙女気であった。

GF幹部が潮を引くように退席した会議室に、ぽつりと井浦司令と現地の参謀が居残っている。

「熱くなって少し放言し過ぎたかしら」と顔を赤くし、防暑服の開けた前ボタンから、谷間の線が見える豊かな胸元に、束ねた黒髪を先を刷毛のように弄びながら、もちもちと井浦祥子は隣の参謀に問いかける。「気取って、ちよつとカッコつけすぎちゃった。えへへ」

「いえ。あのくらい釘を刺しませんと、お偉い方々は寝ぼけたままでございます」と横に控えるメイド服のペナン司令部参謀が、微笑して答える。「しかし、責任重大でございます。岡倉さまは」

見下ろす港の埠頭に、到着した伊一五〇の艦影が見える。

小波みづくや乙女水兵たちが、忙しく働き、糧食の積み込み作業に忙しい。

これからいよいよ三か月の無寄港戦闘航海に向かうのだ。

＊

「ご主人さまー！」とペナン埠頭に係留した伊一五〇の甲板で、呼び止める声が背後から響いた。

魚雷積み込みを手伝っていた男顔の乙女、岡倉光がタオルで汗をぬぐいながら振り返ると、メイド服に参謀飾緒をつけたペナン司令部参謀が立っていた。

「欠員だった軍医殿が補充できましてございます」とメイドの中佐参謀は、裾をまくりあげてパンツを見せ、深々と礼をする。

続きは製品版でお願いいたしますー。